

眠る鉛活字 命吹き込む

廃業の印刷所（山都町）から崇城大へ

愛着の機材「大切に」

2012年に廃業した山都町馬見原の「佐藤活版所」に眠っていた鉛活字と印刷機が、崇城大（熊本市）で学生たちの教材として活用されることになり、7、8の両日、引き渡し作業があった。引き取り手を探していた元店主の佐藤利吉さん（85）は、「苦楽を共にした道具に新たな命が吹き込まれる。ほっとしました」と話している。

【1面参照】

同印刷所は1917

（大正6）年の創業。佐藤さんは3代目で、妻の慶子さん（79）、弟夫婦と共に、名刺や年賀状などを印刷してきた。しかし活字を使わないオフセット印刷が主流となり、廃業を決めた。

作業場には、大きさや種類の違う数十万本の鉛活字と機械が残った。廃業も考えたが、

愛着と思い出が詰まった道具を簡単に捨てる気にはなれなかった。そのような中、引き取り手を探しているとの本紙記事を見た崇城大芸術学部デザイン学科の森野晶人教授（56）が、「授業に活用したい」と申し出た。

引き取りに訪れた森野教授らは、仕事上の苦労話を聞き取った。同大では図書館を移転し、工房に改装。来

り、使い込まれた道具を映像や写真に収めた。技術、歴史などを学んでもらう。「将来的には、一般向けのワークショップも開きたい」という。佐藤さんは、運び出しが終わった作業場を見ながら、「寂しさとうれしさが半々。大切に使ってください」と願っています」（小野宏明）



佐藤活版所から運び出される機械。右奥は作業を見守る佐藤利吉さん（85日）



崇城大の森野晶人教授（右から2人目）に、印刷機などの説明をする佐藤利吉さん（左）と弟の佐藤恒文さん（右端）＝7日、山都町馬見原



崇城大で活用されることになった鉛活字の一部